



毎月第4土曜の新企画!

WE ARE THE WORLD(ウィーアザワールド)

こんなマンガ!

日本語、英語、インドネシア語を使いこなすインドネシア人のヴィヴィアンが描く学園コメディ。日本の学校を舞台に、新米の日本語教師、内田真先生と、外国人の小学生たちが、ゆかいな攻防(?)をくり広げます。毎月ヴィヴィアンがインドネシアの首都ジャカルタから、まんがを送ってきます。

日本語を教えるうちだま(22)です。ウチーって呼んでね!

初めの仕事で外国人の子どもの教えるのは緊張するな

内田真(うちだまこと)先生 (22) 通称ウチー。新米日本語教師。ふっかつが、しかり。クール。

金子よし子(かねよしこ)先生 (23) ウチーの先輩。しかり。クール。

ドリュー・ウィルソン (10) 外交官の親とつしよに日本へ来たイギリス人。

クアミ・アマナ (10) 外交官の親とつしよに日本へ来たガナ人。

デウィ・フトリ (10) 外交官の親とつしよに日本へ来たインドネシア人。

ヴィヴィアン (Vivian) 作者。元医師のインドネシア人。国籍(?) 漫画家。

作者は国際派まんが家 ヴィヴィアン



【プロフィール】
1978年4月、東京生まれ。6歳まで東京で暮らし、インドネシアに帰国。15歳からアメリカ、イギリスへ留学。20歳からアイルランドのローヤルカレッジ医科大学で学び、卒業後、外科の研修医に。27歳の時にジャカルタで、まんが家の茶花ぼこさん=長野市出身=のマンガスクールのことを知り生徒になる。2007年、まんがの勉強のために、日本デザイナー学院(東京)に入学。09年9月から11年6月まで、少年サンデー連載の「ハヤテのごとく!」の作者、畑健二郎さんのアシスタントとして働く。2010年、小学館の少年サンデーの新人を対象にした漫画賞に選ばれ、11年11月、インターネットのコミックサイト「クラブサンデー」で、「国境なき学園」(読み切り)で日本デビュー。

インタビューしてきたよ

出版社との打ち合わせで日本に来たヴィヴィアンを1月23日東京を訪ねました。

- Q. 日本で生まれたいですね
- A. お父さんが産婦人科の医者で、東京の病院で働いていました。家では、日本語とインドネシア語をミックスで話していました。今も日本に来るときは、日本に「帰る」と言っています。
- Q. 小さい時は、どんなアニメやまんがを見ていたの?
- A. ドラえもんやドラゴンボールなど。キャンディキャンディも好きでした。



- Q. まんが家にずっとなりたいと思っていたの?
- A. 子どものころからのあこがれで、大学に入ってから、プロのまんが家になるための勉強もしようと考えていたのですが、医学部の勉強が大変であきらめていました。研修医になってから、偶然、マチコ先生(茶花ぼこさん)のマンガスクールのことを知って、まんが家をまた目指す決心をしました。

- Q. 絵は小さい時から好きだったの?
- A. お母さんに聞いたら、3歳まで言葉がしゃべれなかったのに、絵は2歳から描いていたそうです。お絵かきばかりしていました。

今年のテーマは たんけん 信濃のわざ

今年のこども記者クラブの年間テーマは「たんけん 信濃のわざ」。伝統のわざから新しい技術まで、県内各地のわざとその仕事のプロたちをみんなで取材します。

今年10月には松本市や諏訪市で、技能五輪全国大会が開かれます。スポーツのオリンピック(五輪)と同じように、仕事のわざを競う大会です。約40の種目で、23歳以下の若い選手たちが競います。

今年の元日のこども新聞特集号では、ひと足早く、上田や佐久地方のこども記者に取材してもらって、国際大会で活やくした県内の職人さんたちを紹介しました。



左官の取材で協力してくれた中沢大貴さんは、昨年12月の技能五輪全国大会に出場し、金メダルを取りました

技能五輪国際大会で金メダルを取ったパティシェの上野実里菜さんがお菓子作りを教えてくださいました(上田市で11月取材)



技能五輪国際大会銅メダリストの左官職人手塚雄二郎さんには土壁のぬり方を教わりました(佐久市で11月取材)



次回の取材教室は
「たんけん 信濃のわざ 建具編」
2月26日(日) 午後1時~4時

【場所】 栄建具工芸 (長野市篠ノ井横田)
【講師】 横田栄一さん(70) = 栄建具工芸代表
【定員】 15人程度 ※先着順、定員になり次第しめきり
【内容】 戸やふすまなどの「建具」と、木を組み合わせて細かな模様を作る「組子細工」のわざを取材。組子細工づくりも体験

1月28日付のこども新聞で特集したよ

もし 記者じゃなかったら
~子どものころの夢は...
サッカーそしてエレキギター

Jリーグがまだなかった小学生のころ、後にJリーグの黄金時代を築くサッカークラブの練習場が近所にありました。このクラブは、小中高校の各年代で選抜チームを持っていて、子ども向けのサッカー教室も開いていました。私は4年生のころにこの教室に通い、力を認められ、選抜チームの練習に参加することになりました。

「将来はサッカー選手になる!」。そんな夢を抱きましたが、しかし、選手はみんなレベルが高く、そして、ずるがしこい。審判にバレないように相手のじゃまをするには一なんてことをコーチが教えていたりします。これはちょっとついていけないなあ...と、練習にもだんだん足が遠のいていきました。

習い事と言えばもう一つ。小学4年生からクラシックギターを習っていました。中学のころはロックにはまり、エレキギターを買ってバンドを結成。そう、今度は「ミュージシャンになりたい!」と思ったのです。しかし、高校・大学では構内のボールを追う運動部に入ってしまう、ギターは細々と練習する程度。バンド活動の時間もほとんど取れないまま、新聞社に就職しました。

でも、就職した後も、サッカーやラグビーをやったり、ギターもたまに人前で演奏したりします。おかげで友達も増えました。「芸は身を助ける(はず)」。何かに打ち込んだ経験は、決してムダにならないと思います。

地域活動部記者
阿部貴徳(記者18年目)
金曜「ステップ! 青春のページ」担当